



なぜ環境に配慮するのか？

ジョン・ホートン卿 (FRS)

要旨

地球規模の環境の危機は、地球規模の解決を要請し、持続可能性 (サステナビリティ) がその鍵を提供する。本論は、この問題を、地球温暖化を特にとりあげて考える。神を創造主かつ支え手として信じる者は、神の地球に配慮し、環境の悪化から最も多大な被害を蒙る弱者のために行動をとる強い動機を持つ。

われわれの地元の環境を大切にすることは、単にそれが、われわれが今享受しているのと少なくとも同程度には良い環境を子どもや孫たちに伝えるためだとしても、いつでも重要なことであった。けれども、今日では、危険にさらされているのは単に地元の環境だけではなく、地球全体の環境である。われわれの各々が少量ずつ出す汚染が世界中のすべての人々に影響を及ぼしている。たとえば、非常に少量のフロンガス (CFCs) が冷蔵庫から漏れたり、何らかの工業過程から空气中に排出されたりしたために、オゾン層の破壊が起こっている。化石燃料の石炭、石油、ガスを燃すことで大気中に入る二酸化炭素は環境破壊をもたらしている。急速に増え続ける世界人口や地球資源の過度の使用からの圧力は、そのような環境問題をさらに深刻にし、環境体系にも人間の共同体にもさらにひどい損傷を与えている。人間によって引き起こされた気候変化の危機は今や、ますます広く認識されており、責任ある科学者や政治家たちはしばしばこれを、おそらく「世界が直面している最大の問題」であり、「大量破壊の武器」であると形容している。世界規模の汚染は世界規模の解決を要するのである。

必要な地球規模の解決は、資源の使用や生活様式、富と貧困など、非常に広い範囲に及ぶ人間の姿勢への取り組みを必要とする。これは、あらゆる集団レベルにおける人間社会や、国際機構、諸国の政府、各国の地方自治体の政府、大中小の産業や企業、非政府組織 (たとえば教会) や個人にも深くかかわるのである。問題の広範さを考慮して、このような環境的配慮は、近年、サステナビリティ (持続可能性) と形容される。

サステナビリティとは何か？

ご自分が、遠い惑星を訪ねる大きな宇宙船の乗組員の一人であると想像してみたい。往復の旅は何年かかるであろう。十分な高品質のエネルギー源が太陽の放射から得られる。さもなくば、旅に要するエネルギー源は限られている。宇宙船の乗組員たちは、資源をできる限り注意深く用いることに多くの時間を費やすことになる。宇宙船の一箇所で人工の自給生活圏が作られ、そこでは植物が育てられすべてのものがリサイクルされる。あらゆる資源について、注意深く記



著者紹介

教授ジョン・ヒュートン卿は、大英帝国勲章叙勲者、王立協会フェロー。英国気象庁ハドリー・センター気候予測研究所名誉科学者、持続可能な発展に関する英国政府パネルメンバー (1994-2000 年)、王立環境汚染委員会会長 (1992-98 年) 気候変動に関する政府間パネル科学アセスメントワーキング・グループ議長、共同議長 (1988-2002 年)、イギリス気象庁長官 (1983-91 年); オックスフォード大学大気物理学教授 (1976-83 年)。

録がとられ、代替不可能な成分は特に重要視される。少なくとも往復の旅の期間中資源が保持されることが明らかに必須のことである。

地球という惑星はわれわれが今言ったような宇宙船よりもはるかに巨大である。宇宙船地球号は乗組員数も 60 億人でさらに増え続けており、はるかに多い。持続可能性の条件は宇宙船地球号にも、惑星間飛行を行うずっと小さな飛行船の場合と同様に厳密に当てはめられなければならない。優れたアメリカの経済学者ケネス・ボールドリング教授は、宇宙船地球号のイメージを最初に使った学者である。1966 年に出版した本で、彼は、「開かれた」経済、つまり、「カーボーイ」の経済 (無制約の経済を彼はこう呼ぶのだが) を、持続可能性が最重要な「宇宙船」の経済と比較する¹。

持続可能性は、物理的資源のみではなく、諸活動や共同体についても用いられる用語である。環境持続可能性は、社会的持続可能性、つまり、持続可能な (= サステナブルな) コミュニティや、持続可能な経済状態とも密接に結びついている。「持続可能な開発」は、包括的な用語である。ブルントランド委員会

¹ ケネス・ボールドリング (Kenneth Boulding) は、元コロラド大学経済学教授、アメリカ経済学会会長、アメリカ科学振興協会会長などを務めた。彼の論文 'The Economics of the Coming Spaceship Earth' は 1966 に、Environmental Quality in a Growing Economy の pp 77-82 に公表された。

報告書「われわれの共通の未来」(1987年)は、持続可能な開発の問題の画期的再検討であった。

「サステナビリティ(持続可能性)」の定義は様々に出されてきた。私の知るもっとも単純な定義は「われわれの子孫から欺き取らない」、である。それに加えて、おそらく、「われわれの隣人から欺き取らない」という意味もあろう。つまり、われわれの子どもたちやいかなる未来の世代にでも、地球をわれわれが受け継いだよりも悪化した状態で残すことはしない、そして、世界中のわれわれの隣人と、必要な共通の資源を分かち合い、人間以外の被造物に適切な配慮をするということである。

持続可能性の危機

世界人口が増加して、人々の活動とそれに伴う急速な産業発展は、大規模な環境破壊をもたらしている。けれども、環境の悪化が起こっていることを否定する者もある。科学者は、悪化に関する正確な情報が確かに提供されるようにし、また、人類はいかにしてその問題を解決する取り組みを始められるかを指摘する重要な役割を果たさねばならない。

われわれの現代世界では、まったく持続が不可能な多くのことが起こっている²。実際、われわれは、皆、3つの点で先に私が述べた欺きの罪を犯している。以下の表では5つの重要な問題を列挙し、それらがすべていかに相互関連し、人間の活動や関心の他の重要な領域とも結びついているかを簡略に示す。

重要な持続可能性問題

- *地球温暖化と気候変化: エネルギー、輸送、生物多様性の損失、森林破壊と関連。
- *土地利用の変化:
生物多様性の損失、森林破壊、気候変化、土壌表層侵食、農業、水と関連。
- *消費: 廃棄物、魚、食料、エネルギー、輸送、森林破壊、水と関連
- *廃棄物: 消費、持続可能性と関連。
- *魚: 消費、持続可能性と関連。

これらの連関を例証するために、森林破壊の例を取りあげよう。毎年、面積にしてアイルランドの広さに匹敵する熱帯雨林が伐採されたり焼かれたりしている。それは、高価な硬材を採るための壊滅的作業や、あるいは、世界の中でもっとも裕福な数カ国に牛肉を提供するための家畜を飼育するためだったりする。このレベルの森林破壊は、二酸化炭素やメタンなど大気中の温室効果ガスを著しく悪化させ、人間によって引き起こされた気候変化のペースを速める。またおそらく、森林破壊が起こっている地域の近隣地域の気候も変化させるであろう。たとえば、もし、目下のレベルの森林破壊がアマゾンで続くなれば、アマゾン川流域では、さらにずっと乾き、今世紀のうちにも半砂漠状態になる地域があるだろう。さらに、木がなくなれば、表土は侵食によって失われ、アマゾン川流域の多くの地域で、土は薄くたやすく流し去られる。熱帯雨林は、生物多様性も豊かである。森林が失われれば、非常に多くの取り返ししようのない生物多様性喪失が起こるであろう。

これらのことすべては多大な難問を突きつけてくる。本論では、以下の部分の多くを費やして、世界の最も深刻な環境と持続可能性の問題、すなわち、私が今まで特に取り組んで

きた地球温暖化と気候変化の問題をいくぶん詳細に論じ、これと取り組むうえで科学と信仰の両方ともが果たすべき必須の役割を説明したい。

地球温暖化の科学

基礎的な科学を要約することから始めよう。「温室ガス」は、水蒸気や二酸化炭素など、赤外線反射(熱反射)を地表面から吸収することにより大気中に存在し、地表面を毛布のように覆ってその温度を、このガスがなかった場合よりも暖かく保つ働きをする。自然の「温室効果」の存在は、ほとんど200年近く知られており、生態系やわれわれ人類が適応してきた現在の環境を与えてくれる必要不可欠なものである。

1750年ごろに産業革命が始まって以来、温室ガスのひとつである二酸化炭素が35%増加し、現在の大气中では、かつて何10万年もの間なかったほど高濃度になっている。科学的分析によると、この増加は主に、化石燃料、つまり石炭、石油、ガスを燃やすことによる。もしこの排出を抑制するために何の行動もとられなければ、二酸化炭素の濃度は21世紀の間に、産業革命前の2~3倍になるだろう。

最近数世紀の気候記録によって、外的要因(太陽エネルギーの変化や火山の影響など)や気候体系の内的変動に起因する多くの自然的可変性があることが分かっている。けれども、21世紀の地球規模の平均気温の上昇(とその上昇の進行度)は近代の人類が経験した自然的可変性をはるかに超えるものである。1998年は1860年に機器による測定が始まって以来最も気温の高い年であった。さらに衝撃的な統計結果によれば、1998年は最初の8ヶ月はすべて月ごとの記録でも史上最も気温が高かった。過去15年間の気温上昇は、温室ガス、特に二酸化炭素の増加によるとの強力な証拠が出ている。

地球の平均気温は21世紀の間に摂氏で産業化以前のレベルからすると2度から6度(華氏で3.5度から11度)上昇すると見積もられている。この範囲のばらつきは、温室ガス排出や気候がどの程度影響を受けやすいかに関する異なる推定のためである。地球の平均気温としてこの上昇量は多大である。氷河期中頃と温暖期の差は摂氏5度から6度に過ぎない。それゆえ、21世紀に予想される温暖化と結びついて、氷河期の半分で起こったのに匹敵する度合いの気候変化が100年以下で起こるとことになる。少なくとも10000年分の変化よりも大きな変化である。これに適応するのは人類にとっても多くの生態系にとっても困難であろう。

地球温暖化の影響

しかしながら、地球の平均気温のことを語っても、人間の共同体社会に対する影響についてはあまり分からない。良い影響もいくらかあるだろう。たとえば、緯度の高い地域での生育期が長くなることなどである。しかし、ほとんどの影響は、悪方向である³。一つの明らかな影響は、主に海水が熱せられて膨張することに主として起因する海面上昇(1世紀に約50cm、これは20インチにあたる)による。水面だけではなく深海も温まるのには長い時間がかかるので、この海面上昇は何世紀も続くであろう。そして、低地にすむ人々の社会に多大な問題を引き起こすであろう。パングラディッシュの多くの地域(図1)、中国南部、インドや太平洋の諸島や同様の世界の地域を守ることはできず、何百万人もの人々が住む場所を失うであろう。

² たとえば、UNEP, 'Global Environmental Outlook 3', London: Earthscan Publications (2002), p 446 を参照されたい。

³ よく例証された気候変化とその影響は、A well illustrated account of climate change and its impacts is that of Al Gore, *An Inconvenient Truth*, New York: Rodale (2006) にある。

バングラディッシュの海面上昇による浸水の予想図



図1: バングラディッシュで様々な度合いの海面上昇(単位:メートル)によって影響を受けた土地。約1000万人の人々が標高1メートル以下に住んでいる。

異常気象からの影響もあろう。中央ヨーロッパ 2003 年夏の非常な熱波は 20000 人以上の死者を出した。入念な分析によると、そのような夏は 21 世紀中期には平均的になり、2100 年までには涼しいと考えられるようになると予想されている。

水はますます重要な資源になりつつある。より暖かい世界では水面からの蒸発量が増し、大気中の水蒸気と平均降水量が増える。より重要なことには、水蒸気の濃度が増し、雲が形成されると、より多くの潜凝結熱が放出される。この潜熱は、大気の循環を促進するエネルギーを供給するので、水循環が激しくなる。このことは、集中豪雨が増加しその他の半乾燥地帯では降水量が減少する傾向を意味する。より最近の分析では、2050 年までに異常洪水や干ばつが多く地域で典型的には 5 倍にも増加する恐れがある⁴。平均的に、洪水と干ばつは世界でもっとも大きな被害をもたらす災害なので、それらの頻度と激しさが増すことは、ほとんどの人間社会にとって悪い知らせである。ことに、東南アジアやサハラ砂漠以南など、すでにこれらがあまりにしばしば起こっている地域ではそうである。これらの異常気象を考えれば、気候を大量破壊の武器に譬えることにも信憑性があるだろう。

海面上昇や水の入手可能性の変化や異常気象は、環境難民からの圧力の増加をもたらすだろう。ある入念な算定⁵によれば、気候変化のために、2050 年までには 1500 万人もの難民が増える可能性がある。また、以上要約したおもな影響に加えて、確実性はより少ないがもし起これば非常に大きな、取り返しのつかない被害をもたらすだろう変化がある。たとえば極圏地域で、大きな変化が観測されている。もし、グリーンランドで約3℃(～5°F)以上上昇すれば、万年雪が融け始めるであろう。完全に融けきるまでには 1000 年以上かかるだろうが、それは海拔 7m(23 フィート)の上昇をもたらすだろう。

われわれはこの証拠を信じることができるだろうか

私が今提示した科学の話はどれくらい確かであろうか。これは大体、気候変動に関する政府間パネル(IPPC)⁶の作業

⁴たとえば、ヨーロッパの洪水について、Palmer, T.N. and Raisanen, J. 2002, *Nature* (2002) 415, 512-514;地球規模の異常干ばつについては、Burke, E.J., Brown, S.J. and Christidis, N. *Journal of Hydrometeorology* (印刷中)を参照。

⁵Myers, N., Kent, J. *Environmental Exodus: an emergent crisis in the global arena* Washington DC: Climate Institute (1995).

⁶IPCC 編 *Climate Change 2001* 全 4 巻 Cambridge University Press (2001). IPCC のウェブサイト www.ipcc.ch でも閲覧可。私の著書、Houghton, J. *Global Warming: the complete briefing*, 3rd edn. Cambridge University Press (2004) は、IPCC report に強く依拠して

を通して行われた世界の科学界による査定に基づいている。私はIPCCが設立された 1988 年から 2002 年まで、IPCCの科学アセスメントの議長と共同議長を務めさせていただいた。多くの国から何百人もの科学者がこの仕事に携わった。このアセスメントほどに徹底的に調査され吟味された科学的問題はかつてない。2005 年の 6 月には、世界の 11 再重要国(G8とインド、中国、ブラジル)の科学アカデミーがIPCCの結論を支持する声明を出した⁷。

不幸なことに、強い利害関係が働いて、何 100 万ドルも費やし、気候変化について誤った情報を流した。最初に科学の証拠が否定された。そしてより最近では、気候変化の影響は大きくなならないだろう、まだ、経過を見てみる余裕があるし、もし問題が大きくなればいつでも解決は可能であると論じられたりしている。科学的証拠は、そのような論を支持することはできない。

必要な国際的締約

化石燃料を燃やすことによって大気中に排出される二酸化炭素は、地球規模で目下年間 70 億トン近く、急速に増加している。強固な手段がとられなければ、これは、21 世紀中には現在の 2～3 倍のレベルに達し、気候変化は弱まることなく続くであろう。気候変化を 21 世紀の間に止めるためには、排出量を現在の何分の一かに減らさねばならない(図2)。

すべての国が気候変動枠組み条約(FCCC)で取り決められた締約に加わることが必須である。たとえば、英国政府は、先頭を切って、2050 年までに温室ガス排出量を 60%削減することを目標に定めることに合意した。この目標は、発展途上国に多少の余裕を持たせるために先進国がより多くの削減をする必要があるとの認識をもって立てられている。

財務省は、英国がこの目標を達成するための経費は、この 50 年間で 6 か月分の経済成長学にしかならないと見積もっている⁸。

地球上の化石燃料からの二酸化炭素排出量 (単位 10億トン)

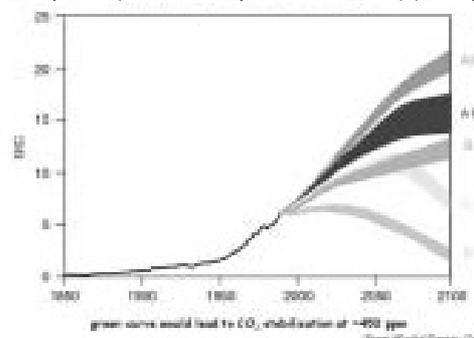


図2 化石燃料の燃焼によって排出される二酸化炭素量(単位: 10億トン)。1990年までの記録と、2100年までの世界エネルギー委員会の予想⁹。AとBの曲線は「通常のまま」での予想であり、C曲線は、「エコロジーに配慮した」場合の予想で、二酸化炭素濃度を450ppm程度で安定させようとする。

いかなる行動が取れるだろうか?

そのような削減を達成するためには 3 種類の行動がとられなければならない。第一にエネルギーの有効利用である。ごく大雑把に言えば、エネルギーの 3 分の 1 は建物で(家庭および

いる。さらに、私が最近書いた評論、(Houghton, J. 'Global Warming, Reports Progress' *Physics* (2005) 68, 1343-1403) は、科学とその関連の影響について簡潔な要約を提供している。

⁷ www.royalsoc.ac.uk/document.asp?id=3222 参照。

⁸ UK government's Policy and Innovation Unit (PIU) (2002 年版)のエネルギー報告書より。

⁹ 出典: *Energy for Tomorrow's World: the realities, the real options and the agenda for achievement*. World Energy Council Report 1993

商業に)、3分の1は輸送機関で、3分の1は生産業で使用されている。これら3つの分野のいずれにおいても、エネルギーの効率を倍にする手段はある。しかも、多くの場合、それによって

大幅な経費削減もできるのである。第二に、広範な種類の非化石燃料エネルギー資源が開発や開拓可能である。たとえばバイオマス(産業廃棄物をふくむ)、太陽光発電(光起電および熱起電)、水力、波、潮力、地熱エネルギーなどである。第三に、二酸化炭素が大気中に入らないように隔離するために、森林を植林したり、ポンプで地下に(たとえば、油田やガス田に)送り込むことが可能であろう。産業界がこれらの分野でなす革新や開発や投資の機会は大である。先進国から発展途上国への技術譲渡もまた、発展途上国でのエネルギー開発が持続可能な方法で進むためには必須である。

被造物に仕える執事たち

人々はしばしば私に、私が環境の持続性について語るのは時間の無駄だと言う。彼らは、「世界は壊れて、必要な行動をとることに同意しないだろう」と言う。私は、自分は楽観的なのだと答える。その一つの理由は、神はご自身が創造した世界を大切にしておられ、われわれは神に与えられた使命として、被造物に仕えるよき執事であってはならないと、私は信じているからである¹⁰。

キリスト教徒が被造物の執事であるとは、どのような意味であろうか？ 創世記の最初の部分で、われわれは、人間が神の似姿に作られ、地とその生き物を管理し世話するように命じられたことを学んでいる(創世記 1:26, 28 & 2:15)。それゆえ、われわれはまず、被造物の面倒を見るように、それも、自分の好き勝手にではなく、神が要求なさるようにならなければならない。神に対して責任がある。そして、第二に、他の被造物に対して神の代理人としての、責任がある。

われわれは個人としても国家としても、世界の資源を使って自分たちのわがままや貪欲さを満足させたい強い誘惑を経験している。この誘惑をわれわれは知りすぎるほど知っている。実際、これは、何ら新たな問題ではなく、非常に古くからある問題である。創世記のエデンの園の物語で、われわれは、人間の罪とその悲劇的結果を知らされる(創世記 3章)。人間は神に従わず、神が近くにいることを望まなくなった。神との関係が壊れたことで、他のものとの関係も壊れてしまった。われわれが環境に見る悲惨な状態は、その、壊れた関係性の結果を雄弁に物語っている。

先進国のわれわれはすでに何世代にもわたって豊富な化石燃料エネルギーの恩恵に与ってきた。気候変化の悪影響が貧しい国々にもわれわれと同様に降りかかり、ますます大きくなる貧富の差をさらに悪化させる向きにあることにわれわれが気づくとき、執事としてのわれわれの役割はわれわれに特に強く訴える要求を突きつけてくる。われわれがよき執事になることを怠るなら、それは、神を愛することを怠ることであり、隣人を愛することを怠ることであり、特に、アフリカやアジアのより貧しい隣人を愛さないことなのである。裕福な国々の道徳的責務は、逃れられないものである。

キリスト教徒の中には、将来がないと彼らが考える一つの世界の後ろに隠れる傾向のある人たちもいる。けれども、イエスは这个世界に戻ってくると約束した。それは、贖われ、変容したこの世である¹¹。目下のところ、この世は、挫折に苦しみながら待っている。最終的な贖いを待ちわびているのである(ローマの信徒への手紙 8:20-22)。われわれの任務は、イエスがはっきりと命じたように、彼の再臨まで責任を持って正しい執事であることである(ルカによる福音書 12:41-48)。この役割を行使することは、われわれの人間としての完成の重要な一部である。現代世界ではわれわれは、裕福で有力になるためにあまりにも経済的目標ばかりに集中してきた。執事の仕事、つまり、われわれの惑星とその資源を大切に管理することは、道徳的、霊的な目標を前面に出すことである。そのような目標に向かって手を伸ばすことは、さし出されている他の多くの目標のどれにおいても不可能なほどに、諸国家や諸民族が効果的に結束して共に働くことにつながりうるだろう。

新しい態度

われわれには、目標だけではなく、持続可能性に向かう新しい姿勢と取り組みも必要である。そして、これもまた、国際的、国家的、個人的を問わず、あらゆるレベルの社会で、なされなければならない。

たとえば、持続可能性は、はるかに多くの分かち合いなしには成り立たないであろう。分かち合いは一つの重要な、キリスト教の行動方針である。洗礼者ヨハネは分かち合いについて説いた(ルカによる福音書 3:11)。イエスは分かち合いについて語った(ルカによる福音書 12:33)。初代教会は喜んですべてのものを分かち合った(使徒言行録 4:32)。そして、パウロもこれを奨励した(コリントの信徒への手紙二 8:13-15)。分かち合いの反対—強欲と貪欲—は、聖書全体で非難されている。個人のレベルでは、しばしば、多くの分かち合いがなされている。国際レベルでは、はるかに少なく、そのことは、世界の富の流れが、平均的には、貧しい者から富者へ流れているという、非難すべき状態をもっとも明らかに示す世界統計に例証されている。

国際社会が直面している最大の「分かち合い」問題のひとつは、諸国間でいかに公平に二酸化炭素排出量を分け合うかである。現在、富裕国とより貧しい諸国との間に、排出量に大きな開きがある。年間一人当たりになると、アメリカ合衆国 5.5 トン、ヨーロッパ 2.2 トン、中国 0.7 トン、インド 0.2 トンのように、異なっている。さらに、一人当たりの地球平均は、現在年間 1 トンであるが、21 世紀の間に大幅に削減しなければならない(図3)。地球の民協会の提案¹²は、まず最初に世界の人々一人ひとりに等しく排出量を割り当て、その後、国家間でその割り当てを委譲することを許可することである。この提案の論旨と基本的公平さは、原則的には非常に説得力があるが、これは達成可能であろうか？ 救済機関によってますます認識されている分かち合いの更なる側面は、たとえば科学や技術など、われわれの技術を第三世界と分かち合うことである。

あなたは、「けれど、個人として私は何ができるのか？」と問うかもしれない。われわれの誰もができることがいくつかある¹³。たとえば、われわれは、家や自分たちの買の家電や車ができる限り熱効率のよいものであるように気をつけることができる。グリ

¹⁰ 一連の入門書的論考として、*A Christian Approach to the Environment*, John Ray Initiative (2005) (www.jri.org.uk); 執事としての勤めの意味についてキリスト教的視点に限らず論じた論文集としては、Berry, R. J. (ed.) *Environmental Stewardship*, T & T Clark (2006); 及び Northcott, M. S. *The Environment and Christian Ethics*, CUP (1996) を参照。

¹¹ Wright, Bishop N.T. *New Heavens, New Earth*, Grove Booklets B11, Ridley Hall, Cambridge (1999) 参照。

¹² さらに詳細は、www.gci.org.uk を参照のこと。

¹³ たとえば、以下が参照できる。'For Tomorrow Too', booklet from Tearfund, www.tearfund.org 2006.

ーン電気[訳注: 二酸化炭素や核廃棄物などを出さない環境を害さない方法で発電された電気]を購入することもできるし、環境に配慮した買い物をしたり、公共の交通手段を用いたり、一つの車に相乗りしたり、できるだけ自転車を用いたりすることもできる。われわれは、問題をより良く知り、政府や産業界で必要な解決法を提唱したり組織したりしている統率者を支持することができる。200年前の英国議員エドマンド・バークの言葉を引用するなら、「わずかなことしかできないからと言って何もしないほど大きな間違いをできる人はいない」。

2000年における人口対一人当たりの二酸化炭素排出量。(M. Grubb(2003) に従う)

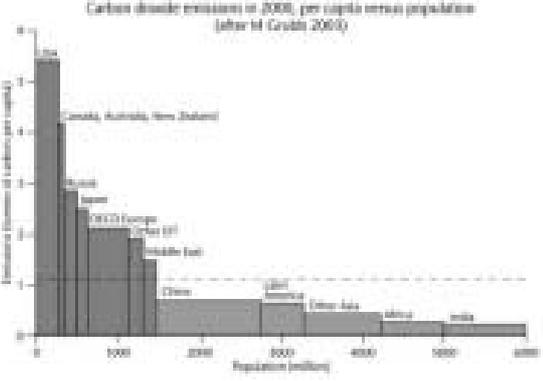


図3 異なる国、異なるグループの国ごとの、2000年における一人当たりの二酸化炭素排出量¹⁴。地球の一人当たり平均は点線で示してある。

神との協力

環境への配慮と持続性の必要性というほとんど不可能に見える問題に直面してわれわれは、ひるむような気持ちができるかもしれない。けれども、本質的なキリスト教のメッセージは、われわれは自分だけで責任を果たす必要はないということである。われわれの協力者はほかならぬ神ご自身である。創世記のエデンの園の物語は、「風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた」(創世記 3:8)と語っているが、ここで、神と人間との美しい協力関係を描いている。確かに神は、アダムとイブに、彼らがどのように園について学び園の世話を始めるのかを問うている。

イエスは死の直前に、弟子たちに言った。「わたしを離れては、あなたがたは何もできない」(ヨハネによる福音書 15:5)。そして、さらに続けて、彼はもう彼らを僕とは呼ばず友と呼ぶと説明した(ヨハネによる福音書 15:15)。僕たちは説明なしに指示を与えられる。友人として、われわれは主の信頼を得ている。われわれは、とるべき行動をこと細かに指図されるのではなく、真の協力関係において与えられている賜物を用いるように招かれている。その課題においてわれわれの助けとなる膨大な潜在的力が被造界そのものの中にある。科学的知識の追求や科学技術の応用は、われわれの執事としての仕事に欠かせない部分である。どちらもしかるべき謙虚さをもって取り組み、用いる必要がある。

環境への配慮は神に与えられた責任であり、この責任を果たさねばならないという間違いようのない難題は、世界のキリスト教会に突きつけられている。これは、キリスト教徒が率先して創造主かつ贖い主なる神の愛を示す前例のない宣教の機会を提供している。これは、また、どこにいる隣人であれ、隣人に対する愛を示す機会でもあるのだ。イエスは言っている。「すべて多く与えられた者は、多く求められ、多く任された者は、更に多く要求される。」(ルカによる福音書12:48)。

¹⁴Grubb, M, *World Economics* (2003) 3, p. 145 に従っている。

ファラデー論集(The Faraday Papers)

「ファラデー論集」はファラデー科学・宗教研究所(Faraday Institute for Science and Religion)を出版者とする。当研究所は St Edmund's College, Cambridge, CB3 0BN, UK, に本部を置く教育と研究のための慈善団体 (www.faraday-institute.org)である。また、本論文集の日本語訳は本多峰子による。「ファラデー論集」で表明された意見は各著者の意見であり、必ずしも本研究所の意見を代弁しているとは限らない。「ファラデー論集」は、科学と宗教の相互作用に関する幅広い論題に取り組んでいる。現在出版されている「ファラデー論集」のリストは www.faraday-institute.org で

閲覧可能であり、そこから、PDF ファイルでダウンロード出来る。
 出版: 2011年7月 © The Faraday Institute for Science and Religion